

28. 《技術者の登用の的中！ 再出発の家康》

1594年（文禄3）、豊臣秀吉は、太閤堤（巨椋池と宇治川を分離）や文禄堤（京街道）を整備し、日本の中心地域に相応しい基盤を築きつつありました。その頃、徳川家康は、新天地の関東において、領民の信頼を得て勢力を保持・拡大できるかがポイントでした。

家康は、台地と低湿地の武蔵国を大改造する政策を断行します。このとき、3人の技術者を代官頭に抜擢し、適所に配置しました。

まず、昔から武蔵国の一大勢力を構成していた多摩川上流域の八王子に、隣国の甲斐国（山梨県）出身の大久保長安（注）を配置。そして多摩川の支川、浅川に堤防を造って（石見堤として現存）領民から信任を得るとともに、甲州街道の警備を固めます。

次に、多摩川下流域には、小泉次大夫（注）を配置。次大夫は、多摩川下流左右岸に用水路を開削して（四ヶ領用水。多摩川右岸側（川崎市）は二ヶ領用水として現存）台地の開発に成功。それは、同時に東海道の要所の繁栄の基礎を築きました。

もう一人は、湿地帯だった埼玉に、伊奈忠次（注）を配置。忠次は、「会の川締め切り」などの治水事業を行います。忠次は、トヨタを生んだ三河地方の出身です。彼から始まる伊奈家3代にわたる利根川・荒川の治水事業は、トヨタの改善運動を彷彿とさせます。それはまた、流路を変えてみて、問題が起きれば改善していくという、今でいうアダプティブマネジメントでもあります。

伊奈家3代にわたる治水改善運動の結果、徐々に武蔵国低湿地帯の水害リスクが軽減されていったと推察します。これが、世にいう利根川東遷・荒川西遷事業の実相でしょう。

こうして、武蔵国は、関東の中心地域へ変貌する足掛かりを見出し、家康は豊臣勢との攻防戦を制していったと考えます。

またその一方で、家康は、江戸の城とまちを、政治の中心に相応しい都市へ大改造を行います（31. 《汐留川の形成と流域喪失・・・江戸城・流域関係史》を参照してください）。なお、そのとき土木工事で活躍したのは、家康に付き従っ

て関東に移住してきた人々であり、当時の土木請負会社の1つが、現在に日本橋にある扇とうちわの老舗「伊場仙」です。

注：主要人物

大久保長安：生没年：1545－1613年、甲斐国（山梨県）出身。後に、佐渡の金山開発など、全国の金銀山を統括し、歴史に名をとどめます。

小泉次大夫：生没年：1539－1624年、駿河国（静岡県）出身。四ヶ領用水の用水奉行となります。

伊奈 忠次：生没年：1550－1610年、三河国（愛知県）出身。忠次に始まる関東代官（関東郡代）は、12代にわたり世襲されました。

写真は、3人の代官の業績と位置（yahoo 水系図に細見が作図）

